

陶淵明「擬古」詩考

二六二

沼口 勝

一

陶淵明の「擬古」九首は、その題意から古詩を模擬した連作のはずであるが、その模擬の對象が先行のいかなる作品であるかを明らかにしていない。その點、晉の陸機の十二首からなる「擬古」の作が、例えば「擬行行重行行」「擬今日良宴會」のように每首その模擬對象を明示するのと異なるのである。また、その創作上の意圖がどこにあるのかという點についても、定説というべきものがないようである。

明の許學夷は「靖節の擬古九首は、略引喩を借りて、己が懷いを寫し、絶えて摹擬の跡無し。其の識見超越し、才力餘り有るに非ざれば、克く此に至らず」（『詩源辨體』）といい、また、清の汪師韓は「陶靖節の擬古九首は、未だ嘗て擬する所何の詩なるかを明言せず、然も題して『擬古』と曰う、必ず後人の漫然と之を爲すが若き者に非ず」（『詩學纂聞』）という。かかる先人の言によつても、該篇の奥行きの深さがわかるのである。

ところで、筆者はかつて「擬古」九首中の二、三首の寓意について解明を試みたことがある^①。それらはもとより不十分な成果でしかないが、それでも従来よりいくらか新しい見方があるかもしれない。そこでこれらを基として、「擬古」九首の作意の一端を明らかにし、その上で作者が「古詩十九首」を中心とするいわゆる古詩というものに、どのような見方をもっていたかということについて私見を呈したいと思う。

二

淵明の「擬古」其一の詩は五言十四句からなる次のような詩である^②。

榮榮牕下蘭、密密堂前柳。初與君別時、不謂行當久。出門萬里客、中道逢嘉友。未言心相醉、不在接杯酒。蘭枯柳亦衰、遂令此言負。多謝諸少年、相知不中厚。意氣傾人命、離隔復何有。

この詩の大意を述べると、冒頭から第十句までは、窗邊の蘭と堂前の柳が繁茂する季節、夫を旅に送り出した婦がその歸りを待つ、しかし、夫は途中で「嘉友」と逢い、その人に心酔して付き従っていったまま、秋が來ても婦のもとに歸らないことをいう。そして、第十一句以下の四句は、語り手の婦が「諸少年」に對し、友人は誠實でなかったのだ、いかに君が命を傾けるかのような意氣込みで相手に接しても、いったん隔たると友情のかけらも残らないのだと戒めることば、と解したい。

次に（其一）の用語について説明したい。夫が旅の途中逢った「嘉友」（第六句、良友の意）は、漢の焦贛の著とされる『焦氏易林』（以下『易林』という）中の左の繇辭を典據とする。

〈A〉初憂後喜、與福爲市、八佾列陳、飲御嘉友。(坤之小過、訟之坎、蠱之小畜)

これらの繇辭は『詩經』小雅「六月」にうたう、周の宣王が尹吉甫に命じた玁狁征伐から凱旋した祝勝の會において、吉甫が天子から燕禮を賜り、賞賜を受け、招いた諸友恩舊と喜びをともにしたことをいうものである。ちなみに「六月」の第六章の文を示せば、次のとおりである。

吉甫燕喜、既多受祉。來歸自鎬、我行永久。飲御諸友、俎饔膾鯉。侯誰在矣、張仲孝友。

繇辭の「飲御嘉友」は、「六月」の「飲御諸友」とほぼ同じ意味、すなわち吉甫の玁狁征伐を助けた文武の高官だと考えられる。

「中道」という語にもその典拠として、『易林』から次のようなことを挙げることができる。

〈B1〉同載共輿、中道分去、喪我元夫、獨與孤居。(比之革)

〈B2〉同載共輿、中道別去、喪我元夫、獨與孤居。(隨之比、蹇之蹇)

この二種の繇辭は同じ意味のものである。その大意は、仲良く車に同乗していた相手が途中から別れ去り、その元夫(善士の意)を失い、孤獨のくらしをしている、というのであろう。そしてこの繇辭は、『易』の「睽」三三の卦、九四の爻辭をその典拠としている。その辭と王弼の注釋を次に示そう。

九四、睽孤、遇元夫、交孚、厲无咎。【王弼注】无應獨處、五自應二、

三與己睽、故曰、睽孤也。初亦无應特立、處睽之時、俱在獨立、同處體下、同志者也。而已失位、比於三五、皆與己乖、處无所安。故求其疇類、而自託焉。故曰、遇元夫也。同志相得、而无疑焉。故曰、交孚也。雖在乖隔、志故得行、故雖危无咎。

右の「睽」の九四の爻辭の意を、王弼注を参照しつつ簡潔に説明しよう。すなわち、九四は初九と陽爻同士なので、本来は相呼應する親しい關係となるべきなのだが、三と五ふたつの陰爻に挟まれ、さらに二と五、三と上がそれぞれに相呼應しているのに對し、ともに下卦・上卦の最下の位置にあつて(志を同じくする)孤獨であり、かつ睽(背きあう)の時にあるので、かえつて友を求めて初九に身を託すこととなる。「元夫に逢う」とはこのことである。つまり元夫とは初九を指し、同志相得たからにはこれを疑うことがない、だから「交孚あり」といい、遠く隔たつていても志を實行できるから、危険であつても咎はない、というのである。

さきの『易林』の繇辭にこの『易』の爻辭を重ねて解すると、かの「中道に別去」した「元夫」とは、實はかつて九四が同志としてその身を託した初九であつた。六爻の位置を貴賤で表した「位」からすると、「四」は卿(近臣)の位、「初」はまだ世に出ない人や庶民に當たる。つまり「睽」の卦九四の爻辭にいう、高位の近臣が信賴して身を託した低い身分の元夫(善士)は、やがて近臣との信賴を裏切り、別れ捨て去つていった〈B1・B2〉の「我が元夫」に他ならないのである。

さて、すでに〈A〉が吉甫の玁狁征伐の祝勝の宴をその内容としていることを指摘したが、實はこの吉甫の玁狁征伐は、東晉末の劉裕による後秦國征伐に擬せられていることが當時の文書や詩賦などの作品に徴しても明らかである。陶淵明も發想を同じくしたようで、前述した『詩經』

の「六月」と、同じく「采芑」(宣王の蠻荆征伐を詠う)とを典據とする『易林』の繇辭中の語を用い、劉裕が南燕國を討ち、盧循の亂を平らげ、そして後秦國を討つていよいよ禪讓を目指す時勢になったことを「飲酒」(二十首の連作の總題)と題したと推察されるのである。

〈C1〉六月采芑、征伐无道、張仲方叔、克勝飲酒。(離之大過)

〈C2〉六月采芑、征伐无道、張仲方叔、克敵飲酒。(小過之未濟)

こうしてみると淵明の「擬古」其一の「中道逢嘉友」の「嘉友」の語が、吉甫の玁狁征伐の祝勝の宴を詠う繇辭〈A〉にもとづくということ、すなわちそれが後秦國征伐から凱旋した劉裕その人を暗示していることを意味するであろう(劉裕の協力者の文武の高官も暗示の対象に考えられるが、當時の情況からはその蓋然性は低いといえよう)。

以上のことを踏まえてこの詩の寓意を解けば次のごとくとなる。

わが東晉王室は桓玄の篡奪によりいったん滅亡したが、孤立した王室を助け、桓玄を追討してこれを再興したのは、劉裕を中心とする下層の將兵たちであった。この情況は『易』のことばでいうと、「睽」の卦九四の爻辭「睽いて孤なり。元夫に遇う。交々孚あり。厲けれど咎無し。」に当たる。九四は東晉王室、初九である「元夫」は劉裕に相當する。劉裕はこれを機に實權を握り、高位に昇り詩中にいう「嘉友」となる。そして劉裕という頼りがいある友人に支えられ再出發した王室、それを詩では「中道にして嘉友に逢う」と表現したものであろう。王室はすっかり劉裕を信賴した。しかし劉裕は初めから王室を奪うつもりであったのだ。詩の第七句以下はそうしたことを暗示していると思う。『易林』の繇辭〈B〉は、王室から頼りにされた劉裕が袂を分かち篡奪に走ったことと、情況的に近似しているといえよう。詩中の用語について説明すると、

「諸少年」とは、西曲歌の「翳樂」に「人言揚州樂、揚州信自樂、總角諸少年、歌舞自相逐。」などと歌うように、當時の民歌に用いられた語で、ここでは詩中の「君」を指して王室を暗示し、また、「相知」は「嘉友」を言い換えた語で、劉裕を暗示するであろう。そして語り手が作者であることはいままでもない。

以上やや詳しく「擬古」其一の詩の寓意の構造を説明した。

三

「擬古」其三、其九の詩の寓意については、すでに詳細に論述したところがあるので、ここではそれについてはできるだけ簡単な説明に止めたい。まず〈其三〉の詩から見よう。

仲春遘時雨、始雷發東隅。衆蟄各潛駭、草木從橫舒。翩翩新來燕、雙雙入我廬。先巢故尚在、相將還舊居。自從分別來、門庭日荒蕪。我心固匪石、君情定何如。

この詩はその内容から全十二句を各四句の三段落に分ける。第一段落は、仲春二月の景物である時雨・春雷・啓蟄・草木の生育を詠い、第二段落において、わが廬に飛來したつがいの燕たちが、やがて舊居に戻っていったことをいい、第三段落で、燕たちと別れてからわが廬の門庭も荒蕪に歸したこと、そしてわが心は變わらないが、きみたちの心情はどうなのかと問いかけて結んでいる。

さて、〈其三〉の詩の特色は、そのかなり多數の用語が南朝民歌の吳聲歌曲・西曲歌(以下吳歌・西曲と略稱する)と重なるという点である(前掲の詩に傍線を施して示した)。その歌曲名を挙げると、吳歌の「子夜四時歌、

秋歌其十四・冬歌其一」「碧玉歌其一」「子夜歌其十」など、西曲の「月節折楊柳歌、二月歌」「江陵樂、其三・其四」「翳樂其二」などである。そして、その中特に重要と思われるのが「月節折楊柳歌、二月歌」と「子夜四時歌、冬歌其一」である。その二首を掲げる。

〔D〕翩翩鳥入鄉。道逢雙燕飛。勞君看三陽。折楊柳。寄言語儂歡、尋還不復久。(二月歌)

〔E〕淵冰厚三尺。素雪覆千里。我心如松柏。君情復何似。(冬歌其二)

〔D〕は戀人の不在を嘆く女の歌である。樂しげに村里に入ってきた鳥、道で出會ったつがいの燕たち、わたしもあなたとふたりして春を眺めたい、(折楊柳)、遠征のわがきみにことづけする、めぐる季節は長くはとどまっていけないのだからと。

第三句の「三陽」の語は、歌中においては春の季節を指すが、周知のように『易』においては陽の爻が三つ連續することをいうのである。淵明がその寓意の手法として『易』の卦爻の辭やその王弼注を用いることはすでに指摘した。結論から先にいえばここでは「泰」䷊の卦の初九の爻辭とその王弼注を用いているようである。それを説明する前に、「泰」の卦辭を見ることがしよう。

泰、小往大來、吉亨。象曰、泰小往大來、吉亨、則是天地交而萬物通也。上下交而其志同也。內陽而外陰、內健而外順、內君子而外小人。君子道長、小人道消也。

「泰」の卦は、坤(陰・地・小)が外卦(上卦)に往き、乾(陽・天・大)が内卦(下卦)に來ているから、やがて下卦の三陽が象徴する陽氣は上昇

し、上卦の三陰が象徴する陰氣は下降して、天地・陰陽が相和する時を迎えようとする、故に吉にして亨るのである。これを人事でいえば、君臣上下が意思疎通し國家安泰の時を迎えることを表す。次に初九の爻辭とその王弼注を見ることがしよう。

初九、拔茅茹、以其彙、征吉。【王弼注】茅之爲物、拔其根而相牽引者也。茹、相牽引之貌也。三陽同志、俱志在外、初爲類首、已舉則從、若茅茹也。上順而應、不爲違距、進皆得志、故以其類、征吉。

王弼注によつて初九の爻辭を解釋すれば、おおよそ次のようになるであらう。

初九は乾卦三陽の首位にある。これが上に昇ろうとするとき、九二・九三の二陽爻とともに昇ろうとする。それはあたかも根のからみあつた茅の一本を引き抜こうとすると、他の茅も根ごといつしよに抜けてくるようなものであるという。しかも昇ろうとする下卦の三陽に對し、上卦の三陰は從順に應じ、背き拒もうとしない。こうして三陽が結束して進むことで上下ともに満足するから、吉となるのである。

右の解釋に、前述した桓玄の僞楚の亂の際、義舉を決定した劉裕とその同志たち、また彼らによつて救出された安帝と再興された東晉朝廷の像を重ねると、よく符合することに氣づくのである。劉裕の父翹は晉陵郡の功曹であつた。裕はまぎれもなく貧士の出身であり、その同志たちも下級士族が多い。まさに「泰」の下卦三陽と符合する。一方、救われた朝廷の人士たちが柔順に裕に従つたことは、義舉以後の東晉の政情が明白に語っている。上卦三陰についての王弼の解釋の通りといえよう。以上のような解釋が高い蓋然性をもつことは、同じ「泰」の卦六四の爻辭とその王弼注を見れば首肯することができるであらう。

六四、翩翩不富、以其鄰、不戒以孚。【王弼注】乾樂上復、坤樂下復、四處坤首、不固所居、見命則退、故曰、翩翩也。坤爻皆樂下、己退則從、故不得富、而用其鄰也。莫不與己同其志願、故不待戒而自孚也。

王弼の解釋の要旨を述べよう。すなわち、四は坤卦の首位にあるが、その位に固執せず、命ぜられれば退く。それはあたかも鳥が高所から翩翩と輕快に飛びくだるようである。四が退けば、五・上の二陰もよろこんでついて来る。四が富んでいなくても（「不富」とは陰爻についていうことば）、また忠告しなくとも、たがいに志願をひとしくし、信賴してついて来るといのである。

六四は、前述したように六爻の貴賤の位でいうと公卿に擬せられる。東晉朝廷における公卿の地位にある者としては、當然宗室司馬氏一族がその中に含まれる。「泰」の卦の六四が司馬氏を指し、しかも「翩翩」の語を以て形容されることから、〈其三〉の「翩翩新來燕、雙雙入我廬」は、西晉惠帝の太安中（三〇二・三〇三）の童謠に「五馬游いで江を渡り、一馬化して龍と爲る」と歌われた渡江の五馬、すなわち司馬氏一族が江南の地に新政權を建てたことを寓意するものであろう。とすれば續く「先巢故尚在、相將還舊居」の二句の寓意は、東晉末期、劉裕の迫害・殺戮を逃れ父祖の地へ歸還していった者が續出したことをいうものであろう。「先巢」は江南の地、「舊居」は中原の地を指す。

最後の二句「我心固匪石、君情定何如」の典據に、從來の注釋は「我心匪石、不可轉也」（詩・邶風・柏舟）を當てるようであるが、〈E〉の「子夜四時歌・冬歌其一」の方が相應しい。これは戀人に對し自分の氣持ちは變わらないが、あなたの心はどうかと問う女の歌である。〈其三〉はこ

れを用い、作者が慣れ親しんだ司馬氏一族の東晉朝廷に對し、親愛の情を披瀝したものと解せよう。

要するに〈其三〉は、北來の司馬氏の東晉朝廷が、劉裕らの義舉により再興し、國家安泰の時を迎えるかと思われたのもつかの間のこと、劉裕の迫害に王室の一族は江南の地を捨てて中原の地に歸つていった。あたかも渡り鳥の燕のように。それ以來、この江南の地は日々に荒蕪している。自分の司馬氏一族に對する愛情に變わりはないが、さてきみたちの氣持ちはどうなのか、と問うて結ぶのである。

四

周知のように、『易』の「泰」䷊の卦を逆にした形が「否」䷋の卦である。陶淵明は「擬古」其三において、劉裕の義舉により東晉朝廷が再興したことを、「泰」の卦初九・六四の爻辭、およびその王弼注を用いて暗示したのであるが、さらに一步を進めて〈其九〉において、義熙十一年（四一五）、劉裕の司馬休之討伐により休之が敗北し、これにより東晉の命運が否塞したことを、「否」の卦の卦辭とその九五の爻辭で暗示しようとしたものと推測される。

否之匪人、不利君子貞。大往小來。

象曰、否之匪人、不利君子貞、大往小來、則是天地不交而萬物不通也。上下不交而天下无邦也。内陰而外陽。内柔而外剛。内小人而外君子。小人道長、君子道消也。

九五 休否。大人吉。其亡其亡、繫于苞桑。

右に見るように、「否」の卦は、上下交わらず、天下に邦なき狀況を表

すのである。そして、九五は貴賤の位でいうと天子に相當するが、その天子が「それ亡びるぞ、それ亡びるぞ」と自己を戒めること、あたかも桑の太い根に物を固く繋ぎ止めるようにして、自己の安全を維持せよというのである。東晉安帝の末期、天子がその安全を繋ぎ止めることのできた存在は、荊州刺史の司馬休之だけであつた。《其九》の冒頭に桑をうえることをいい、第六句に桑の根株をいうのは、桑が晉王朝の象徴であることとともに、「否」の卦とその九五の爻辭により、天子の頼みの綱の司馬休之を暗示したものと考えられるのである。次に《其九》の詩と筆者の試解を示す。

種桑長江邊、三年望當採。枝條始欲茂、忽值山河改。柯葉自摧折、根株浮滄海。春蠶既無食、寒衣欲誰待。本不植高原、今日復何悔。

※傍線を施した語は吳歌西曲と重複することを示す

桑樹をその象徴とする晉朝が、永嘉の亂によつて渡江し、この江南の地に東晉を建てたのは、桑を長江のほとりに植えたようなものだ。朝廷の重鎮司馬休之殿が荊州刺史として三年在任し、いよいよその成果が人々から期待されたのは、桑の葉の收穫が望まれたようなものだった。

司馬氏の後裔がやつと繁榮を迎えようとする時だった、

にわかに山河の姿がかわるような大事件——劉裕による司馬休之殿討伐——が勃發した。

桑の枝や葉は碎け折れ、つまりは宗室の成員が誅滅され、また敗北し、桑の根や株は大海原に浮かび、つまりは朝廷最後の頼みの綱である司馬休之殿が、陸の海と呼ばれる關中の地に逃れていったのだった。春蠶は食う飼料がなくなつてしまつたからには、冬の衣服の準備は誰に期待してよいのやら、

そのように朝廷を慕つていた江南の人々は、これから始まる嚴酷の政治から身を守るのに、いったい誰に頼つてよいものだろうか。とはいえ、もともと高原に植えなかつた桑のような、強固な基盤に缺ける政權だったから、

今日滅亡の事態に至つたことも、いたしかたがないのだ。

東晉末期、司馬氏に劉裕の迫害を怖れ北地に逃亡する者が續出した。例えば司馬楚之の場合、叔父と兄とを殺されて竟陵蠻中に逃れ、從祖の司馬休之が劉裕に江陵で敗れ後秦に奔ると、衆を集めて復讐を謀り、長社（河南省）に據つたのである。ことに安帝殺害後の元熙元年（四一九）には、劉裕の部將王鎮惡の弟康が金墉城を保守したのに對し、司馬氏一族の者がこれを包圍するという事件があつた。『通鑑』元熙元年二月の記事を左に示す。

時宗室多逃亡在河南、有司馬文榮者、帥乞活千餘戶屯金墉城南。又有司馬道恭、自東垣帥三千人屯城西、司馬順明帥五千人屯陵雲臺、司馬楚之屯柏谷塢。

金墉城は洛陽城西北角の小城で、魏の明帝がこれを築き、その死後、司馬氏により天子を廢された齊王芳と元帝（曹芳）が、ともに廢位後ここに遷され、さらに晉朝でも、歷代の天子や皇后が廢されて幽閉された。晉の永嘉五年（三一三）、南匈奴の劉聰の軍によつて灰燼に歸して以來廢墟となつたままの洛陽の中で、金墉城だけが要害として残り、北伐した桓溫もここに駐屯して諸陵を守つた。このように金墉城は多くの貴人たちの牢獄となり、また南北兩勢力の爭奪の場ともなつたのであつた。その城の東北隅に、高さ百尺の樓のあつたことが北魏の酈道元『水經注』

に記録されている。この樓は崇天堂といい、一説に明帝の前の魏の文帝により造られたともいう。また金墉城に近く、魏の文帝の築いた陵雲臺もある。^④ちなみに言えば、「擬古」其四は北邙山を一望する百尺樓を詠っているから、洛陽を都として晉朝が創建されて以来、百五十年餘にわたったその争亂の歴史をふりかえり、慨嘆を漏らした作と推測するのである。

迢迢百尺樓、分明望四荒。暮作歸雲宅、朝爲飛鳥堂。山河滿目中、平原獨茫茫。古時功名士、慷慨爭此場。一旦百歲後、相與還北邙。松柏爲人伐、高墳互低昂。顏基無遺主、遊魂在何方。榮華誠足貴、亦復可憐傷。

以上主として〈其一〉〈其三〉〈其九〉の三首の「擬古」の作について私見を述べた。これ以外の作については、解釋を決定する力ギというべきものがいまだ見いだせないで言及しない。

上述の三首は、手法として『易』の卦爻の辭とその王弼注のことば、および吳歌西曲の歌辭を用い、東晉王朝の命運を寓意的に詠う作であった。これら三首の作の分析検討から、次のようなことを指摘することが可能ではないか。

すなわちこの三首を通じ、南朝の民歌である吳歌西曲の措辭を借用し、あわせて『易』の卦爻の辭とその王弼注を用い、當時の時勢と東晉王朝の運命を暗示的に描く寓意の手法をとることである。そしてそこに作者の、晉末宋初の時勢に強い關心を寄せる態度がおのずと表明されているのである。

これを裏返せば、作者は「古詩十九首」を始めとするいわゆる古詩の一群について、それらの作品中に民歌から受け継いだ詠いぶりと、時勢

に對する感慨を盛るものがあるという認識をもっていたのではないだろうかというようにも考えられる。

五

白川靜博士はその著『中國の古代文學(二)——史記から陶淵明へ』^⑤において、樂府から古詩が誕生する經緯について次のように論じている。

『宋書』『樂志』に錄する漢の樂府古辭とされる相和歌辭三十數編のうち、その半ば以上は五言の形式である。五言形式は、短簫鐃歌のうちにも多く含まれているものであるから、そこからこの新しい民謠の形式が生まれたとみてよいであろう。相和歌辭の古辭には、民衆とその生活感情とが、ゆるやかなリズムと、敘事的な方法で歌われている。それらがやがて、上層社會の宴飲の歌として用いられるのである。」(第三章 樂府と古詩、二 民衆の歌謠)

「樂府歌曲を通じて民謠の享受者であつた士人たちは、しかしいつまでも享受者としてこれを樂しんでいることはできなかった。士人の立場は、郷邑の豪族勢力に依付して上位の權力に連なるとともに、その生活基盤はむしろ貧困な民衆に近く、また富貴を求める上層者とは異なる自己追求的な意識がある。それで民衆の感情は容易に共感され、また士人の生活態度はしばしば民衆によつて支持された。後漢の衰亂のうちに、兩者の體格的な運命觀が強められるとともに、民謠は樂府曲としてでなく、士人の生活感情をそのまま表現するものとして、諷詠されるようになる。それが古詩であつた。」(同右、三 樂府の展開)

「外戚、宦官の跋扈によつて政治の腐敗ははなだしく、これを除こうとする士人との抗争の結果、ついに黨錮の禍を生じた。清流と稱する知識人は相黨與して宦官の暗殺を企て、宦官もまた報復的に黨人をとら

えて大量投獄し、收拾がたい状態となる。窮乏を加えた農民は黄巾の亂に投じ、各地の豪族も郷黨に據つて武装蜂起し、後漢はついに滅びる。士人の最も困難な運命は、この黨錮の際に發している。」(同右、四 古詩十九首)

「邊境への流離や亡命のことを多く述べたのは、當時の士人の運命を象徵することの事實を、文學の背景として考えようとするからである。かれらは、あからさまにこの政治の現實を批判することはできなかった。民謠の形式は、そのような陰微な表現を託するのに、むしろふさわしいものである。士人たちは、その相聞的表現のうちに隠れて、そのおそれを歌った。それが「古詩十九首」の世界であり、その哀音の主調音をなしている。これを單なる民謠と解しては、その底に深く流れる悲哀、運命への慟哭を聞くことはできぬであろう。(略)かれらは自らの運命のなかに、社會の秩序が音を立てて分斷され崩壊してゆくのを、みているのである。」(同右)

博士は、漢の民謠の相和歌辭の五言形式のものが上層社會の宴飲の歌として用いられ、やがて士人たちの共感を得て愛好され、ことに後漢の衰亂のうちに、その自己追求的な意識や民衆と一體化した運命觀が強められるとともに、彼らの生活感情を表現するものとして、諷詠されるようになるのが古詩であり、特に黨錮の禍により多數の士人たちが流離や亡命の運命に陥り、その不條理への慟哭のうたとして諷詠されたのが古詩十九首であつたのであるが、卓論と思う。

古詩十九首が民謠の相和歌辭から生まれ、その相聞的表現のうちに、士人たちの政治の現實と自己の運命への慟哭が隠されているという指摘は、淵明の「擬古」詩が、民歌の吳歌西曲の歌辭を借用した相聞的表現を装い(其一、其三)、さらに『易』や『易林』の辭を用いて東晉王朝の運命を暗示的にうたつたこと(其一、其三、其九)と、なんと似ているこ

とであらうか。

このことは、あるいは淵明が古詩十九首に、過去の士人たちの當時の時勢と彼ら自身の運命への慟哭が隠されていると認識していたことを示すものではないだろうか。

白川博士は、また後漢以後における、時代と自己の運命に對する士人階級の態度表明としての文學について、左のごとく展望する。

「士人階級の文學形式としては、後漢以後の古詩の成立をあげることができであらうが、それは士人的意識の上に形成されたものである。そしてその完成形態を魏晉の文學、特に陶淵明と謝靈運の文學に求めるとではないかと思う。かれらの作品には、敘景詩とよべき自然との對應において、その東洋的な運命論の、それぞれの歸結の方向が示されている。その生活的實踐において、またその自己表現としての文學において、それはこの時期の士人と運命の問題に對する、それぞれの結論を示すものであつたといえよう。」(第二章 史記の世界、一 運命について)

陶淵明はその「感士之不遇賦」の序に、漢の董仲舒の「士之不遇賦」や司馬遷の「悲士之不遇賦」を讀み「慨然惆悵」し、これに感じて作つたといひ、士人の不遇は太古の世の醇朴が失われ、價值觀が分裂混亂して虛妄橫行の現實の中で生ずることから、「寧固窮以濟意、不委曲而累己。既軒冕之非榮、豈縑袍之爲恥。誠謬會以取竊、且欣然而歸止。擁孤襟以畢歲、謝良價於朝市。」の生き方を取るべきだと主張する。つまり董仲舒・司馬遷以來の士人不遇の運命への凝視を引き継ぎ、さらにそれを超克する生き方を追求したのである。

ここに論じた「擬古」の三首の詩は、作者が生きた東晉後半期から宋初にかけての時代に對する、彼の認識と態度表明の、巧緻をきわめた作品であると思われる。

注

- ① 以下の拙稿、拙著を参照されたい。〈1〉「陶淵明『擬古』九首其一の表現手法と寓意について」(『中國文化 漢文學會會報50號』一九九二年六月 中國文化學會)、〈2〉「陶淵明『擬古』九首(其三)の詩の寓意について」(『中國文化 第五八號』二〇〇〇年六月 中國文化學會)、〈3〉「陶淵明の『擬古』(其九)の詩の寓意について」特にその『易』および南朝民歌との關連を中心にして」(『大久保隆郎教授退官記念論集 漢意【から】ころ』とは何か』二〇〇一年二月 同刊行會編)、〈4〉「桃花源記の謎を解くー寓意の詩人・陶淵明」(NHKB00KS910 二〇〇一年二月 日本放送出版協會)
- ② 以下陶淵明の詩文は、中國國家圖書館藏宋刻遞修本の影印本に據った。
- ③ 「穀水又東逕金墉城北、魏明帝于洛陽城西北角築之、謂之金墉城、起層樓于東北隅、《晉宮閣名》曰『金墉有崇天堂、即此地上架木爲樹、故白

樓矣。』(『水經注、穀水注』)、『洛陽(地)記』曰『洛陽城內西北角有金墉城、東北角有樓、高百尺、魏文帝造也。』(『太平御覽』卷一七六 居處部四「樓」)

- ④ 「黃初二年、十二月、行東巡。是歲築陵雲臺。」(『魏志、文帝紀』)、『陵雲臺樓觀精巧、(略)揭臺雖高峻、常隨風搖動、而終無傾倒之理。』(『世說新語』巧藝 第二十一)、『瑤光寺、(略)千秋門內道北有西游園、園中有凌(陵)雲臺、臺上有八角井、高祖於井北造涼風觀、登之遠望、目極洛川。』(楊銜之『洛陽伽藍記』卷一)、『穀水逕洛陽小城北、因阿舊城、憑結金墉、故向城也、永嘉之亂、結以爲壘、號洛陽壘、故《洛陽記》曰『陵雲臺西有金市、金市北對洛陽壘者也。』(『水經注、穀水注』)
- ⑤ 昭和五十六年二月刊の「中公文庫」版による。

(文教大學文學部教授)